

学会ニュース

日本女性学会

第22号 1985年1月

目 次

- 民衆神道の女性観……………浅野美和子…………… 2
- 会員名簿追録…………… 5
- 幹事会開催のお知らせ…………… 7
- エコロジカル・フェミニズムについての一考察……………大村 芳昭…………… 7
- 寄贈図書・資料…………… 9
- 編集後記…………… 9

民衆神道の女性観

浅野 美和子

'84夏のシンポジウム「女性と宗教」について、神道をぬきにしてはこの問題を語れないのではないか、という主旨の走り書き（学会ニュース20号）を送ったところ、研究会での発表を依頼されることになった。発表要旨をまとめる本稿では、先稿との重複も避けがたいが、誤りを訂正したい点もあり、お許し願いたい。

私たちの共通の関心である^{セックス}性別と^{ジェンダー}性役割について、日本の神々は何を語っているだろうか。それを記紀神話と、仏教と習合した近世の民衆神道家の思想のうちに見よう。

『古事記』では、アメノミナカヌシに始まる7柱の神はすべて独神とされるが、近世になって、平田篤胤や大本教によりこのうち2組が夫婦になぞえられ、陰陽の始まりとされることに留意しておきたい。この7神のあと、次々に国土や自然の神々が生成するが、その性別は男神30柱、女神9柱、男女の対偶をなす神々は18組である（アマテラス以後は省略）。島・国・土地などには男女いずれの神も配されているが、風・火・木・顔の神は男に、食物・水・意識の神は女に当てられている。また対偶神たちは野・山・海・川・土地などをそれぞれに分担する。オオヤマツミ — 男、カヤノヒメ — 女というように。またアメノサギリ・クニノサギリのように、アメ — 男、クニ — 女という対応もある。これらの文脈からは、女 — 陰・地・国（地方）、男 — 陽・天・アメ（中央）という役割が配置され、男性優位の中にも女が必要な存在として無視されていないことが読みとれる。

ところで、人間の顔をもつ夫婦にしてきょうだいの神イザナギ・イザナミとアマテラス・スサノヲもこれら共働きの神々の中の2組である。女神イザナミは多数の神々を産むが、男神イザナギも神々を産んでおり、アマテラス・スサノヲもそれぞれ相触れることなく、ウケヒによって子産みをしている。ここには明らかに、偉大な神格には陰陽を一身に共存させようとする両性具有観がみられる。

記紀も「人代」に移ると、地方の首長の中にはタフラツヒメほか4人の女首長がみられ、ウサツヒコ・ウサツヒメなど数組の「姫彦」といわれる男女一対の首長も散見される。また女祖もある。今井堯「古墳時代前期における女性の地位」（『歴史評論』383号）によれば、「汎日本的に……女性首長が存在し……祭祀権をもつにとどまらず、副葬品からして軍事権、生産権を掌握」していたことが古墳発掘によって知られ、男女各一体ずつが並葬される場合も、男女の副葬品

には大差がなく、玉・櫛などの呪具と共に刀・剣・槍・鎌などの武器を伴っている。「人代」が歴史叙述であるとすれば、考古学的発見により、女首長や姫彦の存在は裏付けを見たといえるだろう。

またヤマトヒメなど多くの女性司祭については、これまで柳田国男らにより「妹の力」—女の靈力の発揮された場面とされて来たが、岡田精司氏によれば、これらの例も必ず男性が依り代やサニワとなっており、いわば男女ペアであるという（『宮廷巫女の実態』『日本女性史』〔原始古代篇〕）。記紀の書かれた8Cは古墳前期とは相当の隔りがあるが、素材となった伝承は古い時代のものであったろうし、神々の姿が性役割の区別のないものとして形象化されたのは、そのような現実社会に生きた人々の意識の投影であった筈である。古墳が物語るように統治において男女が対であるならば、陰陽和合のために出産の機能を男にも与えようとした古代人の心が、両性具有観となったものであろう。但しエリアーデやシンガーが書くように、原初の神の両性具有は世界的である。

神道はそれ自体としては教義や理論をもたなかったが、仏教との長い習合の歴史を通じて独自の理論体系を形成した。その場合柱となったのが陰陽説である。

17C末～18C半ばに活躍した増穂残口は、日蓮宗不受不施派から神官に転向した人であるが、「我神化陰陽和合と祝くは男女一雙にして高下尊卑なし。然るに女は男の奴のごとく、何事も男にしたがふ筈と思ふは、支那の礼格に迷ひて我國の道をうしないたるなり」と男尊女卑の世相を批判する。その理由は「人は一箇の小天地なり。天のみさかへ地のみはびこりて立つべきいわれなし」、天地陰陽の和合がなくては自立できず、万物成就ならぬからである（『神路手引草』他）。「夫婦」にはさいあいとかなをつけ、「世の根源」であり、神・仏・聖人などはその後に出たものと言ひ、世間の金銭ずくの便宜婚を非難し、純粹無垢な恋愛を多くの例をあげて讚美している（『艶道通鑑』）

半世紀おくれで安藤昌益は独特の男女観を展開する。「男中に女具わり、女中に男具わり、男女にして一人是なり」、しかも人間は「五穀の精は神真凝り見^まわれて人と成」ったもので、男は転（天）穀を表として定（地）穀を裏にし」「女は定穀を表に、転穀を裏にして見^まわれたものだという。人間を穀靈の現れとみるのは、自然と人間を連続的に捉える農本思想であるが、陰陽原理のはたらきの捉え方はユニークで、男女天地にそれぞれ反対の要素の潜在を認める思惟は、まさにユングばりの両性具有観と言えよう。

同じ頃富士講の一派不二道が食行身祿によって開かれ、江戸から東海各地の人々の信仰を集めた。富士山の頂上の仙元大菩薩がこの世の根元の神「もとのちちはは」であるが、猛火がたち昇って太陽となり、陰の水がおとろえてこの世が傾いた。そこで身祿が富士の胎内にある陰と陽の

綱をつなぎ替え、男の腹へ女の気を入れ、女の腹へ男の気を入れた。これをおふりかわりといい、それによりみろくの世（ユートピア）がもたらされる。とつぎの道（性交方式）に例えれば、男は陽火で上へ昇り、女は陰水で下へ流れるものゆえ、火上水下の方法では陰陽和合の理に当たらない。人間の出生も、母の胎内に入る前に父の胎にも10月10日留まるのだという。男女両神が子を産む『古事記』の神にも比すべき思惟であり、陰 — 女性蔑視が世の傾きのもとだとする所は残口に共通している。さらに「人間はすべて四木の体なり。此四木の男女あつまり八木となり□四木の人間を生ずる」という。だから人間は男女対にならなければ八木二米となれず、一方だけでは不完全である。この点男女にして一人とし、人間を米の精神の現れとみる昌益と同じである。しかし教祖身祿と娘此花は「其身一人にて八木なり」常人の男女二人を兼ねる完全な人格、両性具有者なのである。ところが小谷三志の「おうた」に至ると、両性具有観はさらに徹底する。仕事・風俗・行儀などをすべて男女逆にし、結婚の初夜も嫁が男に先に言いかけ、育児も男がする。「女うつむき男あおむき」、かくて「女がだんなになりました」、このようなとつぎの道は、「なぐさみ事」ではなく「おまつり事」聖なる儀式で、「よき子をつくるその為」である。すべてのジェンダーをひっくり返してみせる「おうた」は「おふり替り」の具体的様相を描いたものと捉えられる。もはや教祖、常人の区別なくすべての人間一人のうちに、陰陽和合を具現し、個々の男女が両性具有者となることをめざすのである。（この項宮田登「不二道と性」によった）

幕末～明治の大本教の教祖観にも両性具有観がある。女性教祖出口なおは自らを男靈女体の変性男子（仏教の変成男子をもじった）クニトコタチ神の現れだとし、男性の「会長」王仁三郎を女靈男体の変性女子スサノヲの化身だとする。変性男子は肉体が水で霊体が火、その靈魂は天の役夫の役を果し、変性女子は肉体が火で霊体が水、靈魂は地の役妻の御用に当る。このような変性男女が^{なてよこ}経緯の仕組となって、世界を錦の機となすという。ここにも不二道と類似した両性具有者二人の組合せ、ジェンダーの転換がみられる。

これらに対し、如来教の教祖はきの一人であるが、女身の胎内、前世は男であり、教えを広めるために、如来の計らいにより女の姿に生れたのだという。その身に憑依する男性神金毘羅と精神的に一体化して、一身に両性を具有する存在である。一般の男女の姿も、永い輪廻の環のうちの仮初の形であり、前世、後世では転換もありうる相対的存在である。他に比べ仏教色の濃い如来教は、輪廻という時間的宇宙のなかで、男女を平等なものとして捉えるのである。また女の始祖を八幡であるとし、既成仏教の女人非成仏説に反対し、女身のままの成仏も可能だと説く。

以上あげた近世民衆神道家の教祖たちは、記紀神話や民間信仰の神々にそれぞれ独自の解釈を施すことにより、両性具有者として現れる。教祖は人間を超えて神業を行なう完全な実在であり、その意味で時代こそ異なれ記紀の神々とも通底する象徴的存在である。一身にして陰陽を併せも

ち、おのずから調和を現出するが故に神なのである。

それに対し一般の人間は、それぞれ反対の要素を内部に持ちつつも、形は陰陽を分ち、女、男と別々の存在である。そこから男女にして一人という対の思想が生れる。男女は相補的であり、性役割の分担が必要となる。そして役割分担の中にも男女の平等を認めようとするが、それは結局子孫繁栄、五穀豊穡へと収斂していく農業社会の思惟なのである（如来教を除き）。しかし不二道の「おうた」のように、すべての人間に教祖と同じ両性具有性を期待するとなると、性役割は否定されてしまい、等質で平等な男女が現れてくる。結果として私たちの求める自立的な人間像に類似してくる。しかし決定的な違いは、「近代的自我」や「基本的人権」の発想が全くなく、（如来教以外は）「家」の中の人間だという点にある。けれども、女を不浄なもの、三従の徳に依るべきものとしてきた一般的な社会意識へのマイナーな反指定として、民衆神道の女性観は歴史的に評価さるべきである。

上述のような神道の女性観がはっきりした形で現代に残存しているかどうか不明だが、日本社会の基層に女性原理が支配的であるとはよく言われることであり、それらは女性解放のあり方に複雑な陰影を投げかける。しかしキリスト教的男性原理でなりたつヨーロッパ文化においては、女性は自然、肉体、非文化という負担ばかりを与えられて来た。解放をめざす女性は、男性化するか魔女になるしかないという状況を切りひらき、性役割からの解放がうたわれ実行されるようになってきた。逆に日本女性は女性原理の中で、性役割に満足し、財布を握って眠っているように見える。

陰陽和合、両性具有を唱える^{クオイズム}道教の評価をユング派から逆輸入するだけでなく、私たち自身の見方でそれらを積極的に生かしていくことはできないだろうか。

◎ 会員名簿追録

以下のお2人は1984年度の名簿作成の際、当方の手違いにより記載から漏れてしまいました。幹事選出の公正という点で、また御不便・御迷惑をおかけした点で、当事者お2人および会員の皆様方に深くおわび申し上げます。また、白藤さんは海外在住のため、会費納入の御催促が不徹底でありました。名簿作成と相前後して会費が納入されましたので、継続して会員であることが確認されました。（名簿担当幹事より）

大 賀 美 弥 子



ゴスマン, エリザベス

聖心女子大学教授

Philosophy

白 藤 青 湖 c/o Bonus Store, 267 MacNab St.N.
Hamilton, Ontario L8L 1K2, Canada

歯科医師 主要関心：小児歯科、女性の地位

◎ 新 入 会 員

大 村 芳 昭

東京大学教養学部学生

赤 木 真 理 子

サイマルアカデミー学生

館 かおる(再入会)

お茶の水女子大学女性文化資料館助手

主要関心 女子教育史、日本女性史など

◎ 住 所 変 更

田 中 弘 子

鳥 居 千 代 香

◎ 転 居 先 不 明

(通信物が戻ってきています。御存知の方、事務局に御一報を。)

山 田 節 子



幹事会開催のお知らせ

日 時 1月26日(土) 午後1時半～6時ごろまで

会 場 法政大学研究棟7階会議室

TEL (03) 264-9817

国電(総武線)飯田駅または市ヶ谷駅下車。川沿いに徒歩約10分。

地下鉄有楽町線市ヶ谷駅下車。

幹事会は公開されておりますので、皆様是非御参加下さい。

* * *

昨年福井美津子氏に続き、このたび、亀山美知子さんの業績『近代日本看護史Ⅱ・Ⅰ』(ドメス出版)に対し、「第4回山川菊栄記念婦人問題研究奨励金」が贈呈されました。日本女性学会としてこれをお祝いし、今後の一層のご発展を期待したいと思います。

代表幹事 藤枝 滯子

<< 会員投稿 >>

エコロジカル・フェミニズムについての一考察 ——「女の自立・男の自由」を読んで

大村 芳 昭

エコロジカル・フェミニズム……最初にこの言葉と出会った時、私はその意味を解釈できなかつた。当時(昨年、即ち私が大学1年生の頃)の私にとって、エコロジー(生態学)は単なるひとつの無色な(特定の思想や主張とは無縁の)学問であり、フェミニズムは目的的な運動であったために、両者を直接結びつける発想が不可能だったのである。

しかしその後、両者が「つくられたもの」に反対する性格において共通する、というボンヤリとした認識が生まれ、それが先日、菅孝行先生の『女の自立・男の自由』を読むことで明確な統一的理念として把握できたのである。以下、甚だ未熟ではあるが、その把握したところを若干述

べることとする。

近代において、人間は文明の力を痛感し、懸命になって文明化の道を歩み始めた。その文明とは、自然を対象化し、それを使いこなし、克服していく人為としての文明であり、必然的に自然を抑圧することとなる。これを個々の人間について言えば、人はその肉体（人における人為）によって克服すべきであるということになり、ここに身体の疎外（自分の肉体を克服の対象として価値的に低く見てしまうこと）という現象が生ずる。

ここに於いては、精神作用とは無関係に生ずる生理現象こそが、完全に「肉体的な」現象として克服対象とされ、蔑視されることになろう。そして、この生理現象が外部に現れる機会が相対的に多い女性は、男性に比べて「肉体に拘束された存在」「肉体を克服できない存在」として低く見られる（差別される）ことになるのである。つまり、

①文明化 → ②自然の抑圧 → ③身体の疎外 → ④性の蔑視 → ⑤女性差別

という論理展開が可能となる。

私の乏しい理解によれば、エコロジーは、自然を無視し、あるいは単に対象化した文明化の進展や自然の抑圧に反対する思想を有しており、前述の①、②へのアプローチを行うものである。一方、フェミニズムは、既存の性別役割分業や男女差別に反対し、その克服を企図するものであって、前述の④、⑤へのアプローチを行うものである。

とすれば、エコロジーとフェミニズムの両者は、「自然の復権」を媒介として、論理的に連帯できる必然性を有しているように思える。両者を包括した「文明化 → 性差別」の論理は、現代に於ける価値観に対するアンチ・テーゼとして、十分に妥当し得るのではないだろうか。

以上が、小田急線下り各駅停車の車内で「女の自立・男の自由」を読みながらふと考えたことである。正直に言って、私が現在のところエコロジカル・フェミニズムについて知っているのは、その名称だけである。その割にはかなり偉そうなことを書いてしまったが、今後エコロジカル・フェミニズムに取り組む時が来たなら、必ずや現在のこの把握が（何らかの意味で）役立つであろうと確信するものである。

寄 贈 図 書 ・ 資 料

- 『ぼくのいもうとがうまれた(写真絵本)』 北沢杏子著、アーニ出版、(北沢杏子さんより)
- 『婦人情報センターだより』№18、東京都婦人情報センター
- 『地域-家族』Vol.VⅢ、№3、「地域-家族」編集委員会
- 『月刊婦人展望』84年10月号、市川房枝記念会出版会
- 『会館だより』第27号、国立婦人教育会館
- 『婦人教育情報』№10、《特集》主婦の再就職と教育・学習、国立婦人教育会館
- 『国立婦人教育会館所蔵雑誌目録(昭和59年3月末現在)』国立婦人教育会館情報図書室
- 『VOICE OF WOMEN』№54、№55、日本女性学研究会
- 『JAUW』134号、135号、大学婦人協会
- 『思考の前に先行する視考』 古閑創三
- 『国会議員の男女平等観』 日本女性学研究会教育者会議編、さんえい出版、
(富士谷あつ子さんより)

編 集 後 記

昨年12月1日の幹事会で、新旧幹事の引継ぎが行なわれました。従来の会計、事務局、企画、幹事会ニュース、ニュース・レター編集、といった役割分担が決められましたが、具体的な取り組みはいずれもこれからです。手作りの会です。皆様方の御意見や御協力を一層お願いする次第です。なお、会員の方で事務局の仕事をボランティアで手伝って下さる方がありましたら御一方下さい。

(亀 山)

学会ニュースでは、常時、皆様からの御意見レポート等を受けつけておりますので、御投稿下さい。なお、原稿はお返ししませんので、必要な方は、コピーをおとり下さい。

発行 日本女性学会

〒103 東京都中央区日本橋2丁目2番1号

呉服橋共同ビル2F ワールド・カルチャー・サービス内

電話 03-274-1791

郵便振替口座 東京 8-49189

住友銀行日本橋支店 普通口座 451169